

村上院長(むらかみ眼科クリニック・宇土市)がまたも快挙

## 「使い切り点眼薬開封器」の発明特許を取得

## 視覚や手指障害者への重症ドライアイ治療に光明

先頃、「ドライアイ治療用マスク」を発明して特許を取得したばかりの、宇土市南段原町むらかみ眼科クリニックの村上茂樹院長がまたも新たな発明で、特許を取得した。

今回の発明は「使い切り点眼薬開封器」で、視覚障害や手指障害者への重症ドライアイ治療に光明をもたらすものと期待されている。

村上院長の今回の発明は、リウマチ患者から「手が痛いので点眼薬の開封が困難。何とかならないか」と相談を持ちかけられたのがきっかけという。

重症のドライアイ症状である「シェーグレン症候群」は現在、約百万人が患っているリウマチ患者のおよそ20%が合併するといわれ、著明な涙液の分泌低下(重症のドライアイ)や唾液分泌低下(ドライマウス)等の乾燥症状を主症状とする全身性の自己免疫疾患。このためシェーグレン症候群の患者は、全国で約20万人以上にも達すると報告されている。

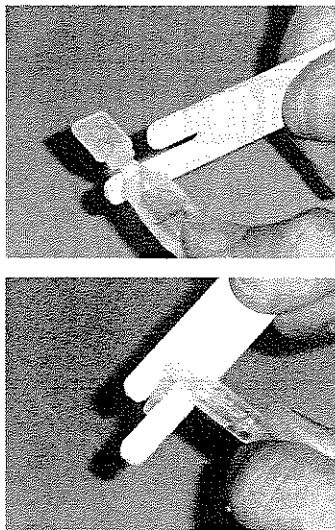
シェーグレン症候群と共に、重症の視覚症状を合併する「ステイブンス・ジョンソン症候群」等の患者も重症ドライアイ症状が特徴で、これら両眼病の患者には防腐剤を含有し

ない1回使い切り点眼薬の使用が角膜や結膜障害を防止するために推奨されている。

リウマチに併発したシェーグレン症候群の患者のように、手指先が不自由であったり、ステイブンス・ジョンソン症候群のような視覚障害がある場合には、1回毎の使い切り点眼薬のカプセルの開封が非常に困難を極めていた。

このように手指や手指先が不自由で、視覚障害がある患者にも、簡易で安全、しかも清潔に1回使い切り点眼薬の開封装置であることから特許認可が得られた。

この特徴は、長めと短めの挟持杆かんによって手指や眼が不自由であっても、使い切り点眼



真つすく差し込んだあと、指先でパチンと折るだけ。

薬のくびれた折開部が挟まれるように引き込むことができる案内構造(ガイド機能)を有している。これによって1回使い切り点眼薬のカプセルが折開部の付近を本開封器の長めの挟持杆に当たって、そのまま直線上に真つすく移動して差し込むことによって、簡単に確実に点眼薬のカプセルの折開部分が固定される。さらに指先の力を入れずに、手首を軽く回転させるだけで、手指を使わずに、清潔に点眼薬のカプセルを開封することができる。しかも、この開封器は軽量のプラスチックで携帯にも便利。

従来、ハサミで切断するときは、ハサミの刃先に付着した細菌が切断口を介して点眼薬に混入し、細菌による感染を併発することが問題になっていたが、本開封器では、開封部分に本開封器が接触しない長所をもっており、安全で清潔に開封できるメリットもある。

使い切り点眼薬は、一般的に重症の乾性角結膜炎、重症のドライアイに対する防腐剤なしの人工涙液やヒアルロン酸点眼薬、また、防腐剤なしの抗生物質や抗アレルギー剤の点眼薬等が発売されている。